審　査　の　結　果　の　要　旨

氏　名　ﾊﾞﾙﾙ　ｼｭﾘﾔｽ　ﾌﾟﾗﾓﾄﾞ　ｳﾞｨｼﾞｬﾔ

インドでは、ムンバイーアーメダバード間において高速鉄道が初めて建設されようとしており、当該高速鉄道コリドーの発展をいかに進めていくかがきわめて重要な政策課題となっている。世界的にも民主主義体制下の新興国における高速鉄道建設は初めての事例であり、研究課題としての意義はきわめて高い。本研究は、独自に構築した研究枠組みのもとで、インドのムンバイーアーメダバード高速鉄道コリドーを事例として都市圏リンケージ強化と高速鉄道駅周辺開発に関する研究を行った先駆的な研究である。

以上の背景のもと、研究の目的は、以下のとおりである。

（１）　高速鉄道コリドーにおける都市間リンケージ構造の解明

（２）　高速鉄道駅周辺開発に関わるマルチスケールの組織・制度分析

（３）　高速鉄道駅周辺開発に関わるステークホルダー間関係の解明

（４）　都市圏リンケージ強化の観点からの高速鉄道駅周辺開発のあり方の提言

本論文の構成は、以下のとおりである。研究の背景を示した第１章に続いて、第２章では、高速鉄道と地域発展ならびに高速鉄道駅周辺開発に関する広範な文献レビューを行っている。とりわけ、日本、韓国、台湾、欧州、中国の高速鉄道既設地域の事例研究・報告書を広範に収集し、各地域における高速鉄道の地域開発効果について整理・分析した点は、学術的な価値に加えて、実務的な観点からも有益性が高く評価される。第３章ならびに第４章では第２章でおこなった文献レビューに基づいて、独自の研究枠組みを提示している。とりわけ、高速鉄道コリドーを、国、州、都市圏、都市という異なるスケールでの企業間ネットワーク、ステークホルダー間関係、マルチスケールのプランニング制度ならびに都市開発制度という観点から、独自の分析枠組みを提示した点に学術的な新規性が認められる。

第５章では、インドの都市化構造の分析を行い、都市規模に基づくヒエラルキー構造の存在を指摘した。第６章では、高速鉄道沿線のアーメダバード州ならびにマハラシュトラ州の都市計画ならびに都市開発制度について、円滑な駅周辺開発の実現という観点から分析を行い、その課題を抽出している。第７章では、企業間ネットワークのビッグデータ分析を通じて、ムンバイーアーメダバード・コリドーの都市間リンケージの分析を行っており、同コリドーが、第６章で示した都市規模に基づくヒエラルキー構造に加えて、産業分担に基づくセクター特化構造、さらに企業間ネットワークに基づく機能特化構造の３つの異なる構造から成り立つ地域構造を形成していることを解明した。この結果として、高速鉄道のインパクトとして機能特化構造が強化され、ムンバイへの一極集中が進展する可能性を指摘される。第８章、９章では、現地調査、計画文書・図面分析、詳細

なステークホルダーインタビュー調査の結果とその分析内容を示している。結果として、異なるスケールのステークホルダー間の連携の欠如、鉄道事業と都市開発関連組織間の連携の不足とその結果として生じている計画間の齟齬を詳細に分析している。

以上の分析を踏まえて、第９章で結論として、（１）都市間リンケージとして機能特化構造がますます強化されていること、（２）都市間リンケージ強化のためには地域レベル、都市レベル、駅周辺地区レベルの計画調整が重要であること、（３）新たに創設された高速鉄道公社に加えて、駅周辺開発をコリドー全体として調整する新たな政府機関の創設が必要となること、の３点を指摘した。

本研究の重要な学術的貢献として、第一に、新興国における都市間リンケージ構造の形成を企業間関係という観点から初めて実証的に解明したこと、第二に、必ずしも都市開発に関わる制度・組織が十分に整備されているとはいえない新興国において高速鉄道の導入にともなって重要となる駅周辺開発において課題となる都市計画制度ならびに開発調整組織のあり方について詳細なインタビュー調査を通じて実証的に分析したことが挙げられる。加えて、分析を通して得られた政策的示唆として、コリドースケールでの駅周辺開発の調整の必要性とそのための組織整備の必要性を指摘したことは、まさにこれから高速鉄道を導入しようとしているインド政府に対する政策提言として実践的な意義がきわめて大きい。

本研究は、上記のように、独自の理論枠組みと詳細な実証分析のもとで、高速鉄道コリドーの都市間リンケージ構造の解明と、同リンケージ強化のための駅周辺開発のあり方について詳細な分析をおこなった新規性のきわめて高い研究であり、学術的に優れた価値を有していると同時にきわめて有益な政策的含意を提示するものとなっている。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。